

# STOP 糖尿病

H30年 糖尿病ケアチーム通信 第3号

## 増えている？1型糖尿病

1型糖尿病は、すい臓のβ細胞の破壊によるインスリンの欠乏を成因とする糖尿病です。

これまで1型糖尿病は「インスリン依存型糖尿病」とか[小児糖尿病]と呼ばれ、20未満の小児、思春期に発症するのが1型糖尿病、成人の発症は2型糖尿病とみられていました。

しかし1型糖尿病はすべての糖尿病の5%ほどを占め、その40%以上は30歳以降に発症するといわれています。

1型糖尿病は、進行の経過により3つのタイプに分かれます。

### 【劇症型1型糖尿病】

糖尿病の発症後、数日のうちにβ細胞が破壊されてインスリンが分泌されなくなるタイプです。急激に高血糖となりインスリンが必要になります。

### 【急性発症1型糖尿病】

口渇、多尿、体重減少などの糖尿病の症状があらわれてから3か月以内でインスリンが必要となるタイプです。劇症1型糖尿病と急性発症1型糖尿病は、発症後急激にインスリンが不足する為に、著しい高血糖によって血液が酸性となるケトosisやケトアシドーシスに陥る事が特徴です。

もうひとつが

### 【緩徐進行1型糖尿病】です。

発症当初は、2型糖尿病と同様、食事や経口血糖降下薬のみで治療でき、発症3か月以内にインスリン療法を必要としない糖尿病です。

徐々にβ細胞の機能が低下して、発症から数年をかけてインスリンが分泌されなくなります。

一般的には、発症から3~4年で1型糖尿病の治療方法であるインスリン療法が必要となる病気ですが、10年以上もインスリン分泌が保たれてインスリン療法を必要としない場合もあります。

発症時には2型糖尿病と診断され、のちに緩徐進行1型糖尿病と診断される事があります。

## 1型糖尿病と2型糖尿病の相違点

	1型糖尿病	2型糖尿病
成因	自己抗体を基礎にした、すい臓β細胞の破壊により発症	インスリン分泌低下・抵抗性に、運動不足などの環境因子が加わり発症
インスリン分泌能	絶対的欠乏 <b>インスリン依存状態</b>	相対的なインスリン分泌低下や抵抗性 <b>インスリン非依存状態</b>
基本となる治療法と補助的な治療法	基本：インスリン療法 補助：食事と運動	基本：食事と運動 補助：薬物
遺伝的な素因	2型の場合より少ない	しばしばあり
発症年齢	小児～思春期が多いが、中年でも認められる	40歳以上に多いが、若年発症も増加
肥満度	関係なし	肥満または肥満既往が多い
膵島関連自己抗体	GAD抗体、ICA、IA-2、IAAに陽性率が高い	陰性

当院でもすこしずつ、2型糖尿病と診断されていた患者さんが緩徐進行1型糖尿病と診断されるケースが見られるようになってきました。2型糖尿病が食事療法や運動療法が第一の治療であるのに対し、**1型糖尿病は、年齢、性別に則した栄養を摂取する必要があります。その為、食事量や運動量に応じたインスリン調整を中心に考える事が大切になります。**

文責 糖尿病療養指導士 看護師 梅村 / 栗本